

季節のしおり

日本には四季折々の自然の美しさがあり、それを代表するものが冬の雪、秋の月、春の花とされている。ここでは、雪月花をテーマに、それぞれの季節を感じてみよう。

花

世の中に絶えて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

在原業平

時に、初春の令月にして、
気淑く風和らぎ、
梅は鏡前の粉を披き、
蘭は珮後の香を薫らす。

令月しづかい月 気淑よく 風和やわらぎ

「万葉集」梅花の歌の序文(元号「令和」の典拠)

大伴旅人

月

秋風にたなびく雲の絶え間より
漏れ出づる月の影のさやけさ

藤原顕輔

名月や池をめぐりて夜もすがら

松尾芭蕉

雪

むまさうな雪がふうはりふはり哉

小林一茶

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

三好達治「雪」より

花にまつわる言葉

花明り

桜が満開で、日が暮れてもほのかに明るく感じられること。

花霞

満開の桜が、遠目には霞のように淡く見えること。

花便り

花の咲いた様子を知らせる便り。桜の花を指すことが多く、「花信」ともいう。

月にまつわる言葉

月影

月の光、月明かり。月の光に照らされた物の姿や、月の姿そのものを指すこともある。

有明の月

夜が明けてもまだ空に見えている月。残月、朝月などもよばれる。

望月

十五夜の月。満月。特に(旧暦)八月十五日の夜の月をいうこともある。

雪にまつわる言葉

雪明り

積もった雪の反射により、夜も周囲が薄明るく見えること。

細雪

細かい雪や、まばらに降る雪。

六花

雪の異称。「むつのはな」、「ろっか」ともよばれる。

